バカと科学者と召喚獣

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと科学者と召喚獣

【Nコード】

N7529K

【作者名】

nao

【あらすじ】

バカテスのオリ主です。

駄文ですがよろしく願います。

キャラが時々おかしいかもしれませんがスルーの方向で・・・

プロローグ

ココハドコダ？

ボクはきずいたら真っ白な世界にたたずんでいた。

ボクは確か部屋でネトゲをやっていたはずなのに・・・
いったいなぜ？

「それはワシが答えよう」

声のするほうを見ると爺さんがいた。

「ワシは神じゃ」

なんだこの爺さん、ボケているのか？？

「いや、ボケちゃおらんぞ」

まだなにもいってないぞ！？

「心ぐらい読めるわ」

じゃあ本当に？？

「そうじゃ」

なにになにボクは死んだの？？それとも・・・

「すまぬ」

何で誤ってんの？

「それは・・・わしが間違っただけ・・・」

ま、間違えって？？

「殺しちゃった」

「殺す！！」

「まて、まつのじゃ」

「なんだよ」

「お詫びとして、転生させてやるから」

「マジか！？」

「ホントじゃ、ただし元の世界はダメじゃ」

「そんなことどうでもいい、ホントにどこでもいいのか！？」

「どうでもいいって・・・うむ、どこでもよいぞ」

「よっしゃ〜!!」

どこにしようかな〜

禁書にしようかな〜自分の能力とか気になるしな〜

けど無能力だったらつまんないしな〜何より辛そうだし・・・

じゃあ狼と香辛料か? いやあれは難しいし、

何よりあの二人の仲に割ってはいえる自信がない・・・

あでもないこうでもないと思っていいたら

「バカテスでいいか」

「了解じゃ、ある程度自分の設定ができるがどうする?」

「んじゃ、学園長の孫で、Aクラス以上の学力で、天才的な科学者
で」

「それはなんかチートくさいのう〜」

「いわれられてみれば、なら何か一教科だけFクラスなみで」

「それでいいかのう、ならそろそろ送るぞ?」

「了解」

そういうと、足元に魔方陣みたいのが浮かんできた。

「では、よい旅を」

そういわれて、ボクの意識は落ちていった。

プロローグ（後書き）

どうでしたか??

なにぶん初めてなので誤字脱字があると思いますが・・・
コメントあれば何でもいいのでください。 m () m

プロローグ2

目が覚めると知らない部屋に寝ていた。

「無事ついたみたいだな・・・」

若干声が高い様な気がするがまいいか・・・

とりあえず状況を確認しよう。

そう思い俺は周りを見渡す。

なんかでかくない？

そう思い鏡を見てみる。

これが俺？

小さくない??

そう思いパニックっていたら机の上に手紙があった。

「藤堂 直へ

この手紙を読んでいるってことは無事みたいじゃのう

今のお前は、中学1年じゃ、明久たちも同じじゃ

ちなみにお前は明久と幼馴染じゃ

そこらへんは、お前の記憶をいじってあるから大丈夫じゃ

では、二度目の人生をごゆっくり

p s この手紙、読み終わっ

たら消えるから」

なんだって!?

そう思ったらホントに手紙が消えた!!

まあいいか。

そっかあゝ中一かゝ

けどそれにしては小さくないか?

145cmくらいしかないぞ？

まあいいか

これからがんばるか？

進学！！その巻（前書き）

主人公ナオの、一人称が時々俺になってるかも・・・

進学！！その壱

4年後

「ナオくん、起きて」

「んう」

「起きてって」

そういつてボクを揺さぶっている人はボク的最愛の人である伊藤咲である。

咲はボクの許嫁である。

最初は、親がとゆうか、ばっちゃんが勝手に決めた人だったが・・・この話はまた今度で

今は眠い・・・

「おはよう、サキ」

「おはようじゃなくなって早くしないと遅れちゃうって」

「えっもうそんな時間??」

「そっだよ早く」

「んっりようかいzzz」

「ナオくん!!」

「は、はい!!」

「はやくね」

「イエスマム・・・」

あぶないあぶない

また寝てしまう所だった。

ボク達の学園、文月学園は、最先端のシステムを導入した試験校で2年生からは、

成績がいい順にAで最低はFクラスである。

サキと何気ない話をしながら、登校したら、鉄人もとい西村教諭が

いた。

「おはようございます、西村先生」

「おはよう、鉄村」

「おはよう、伊藤・・・ナオ、いくら学園長の孫だからってそれはないぞ」

「すみません、西村先生」

「いやいや、サキが謝ることじゃないよ」

「ナ、オ、ク、ン!？」

「すみません西村先生」

そういつてボクは、頭を下げた。

ボクはサキに完璧に尻にしかれているのだった・・・。

「うむ、解ればいいのだ、そしてナオ、俺はお前のことも一人の生徒と見ているからな」

「そうですか・・・望むところです!!」

この人のこういうところは好きだ。

他の先k・・・ゴホン先生はボクを学園長の孫としかみていないからな。

なぜ、ボクだけ名前なのかというと苗字で呼ぶとなんか嫌なのだと前に言っていた。

「そうか、そして伊藤これを」

「は、はい」

そういつて、サキに封筒を渡した。

サキははつきり言っておバカさんだ。

だが、ボクが一生懸命に教えたからEクラスなのでは!？とおもおうのだが・・・

「ナオ、俺はまさかお前があんなことやるとはおもわなかったぞ」

「くっ!!返せる言葉がない」

ボクはというと、テスト中にアイディアが浮かんで早退。

テストは0点となり、自動的に、Fクラスとなった。

「サキどうだった?」

「ナオくん、ゴメン」

やっぱり、Eクラスだったのか？

せっかく同じクラスだと思ったのに・・・

「せっかく教えてもらったのに・・・Fクラスだった」

「!?!」

「お、怒ってる??」

「い、いや怒ってないけど何故謝った??」

「だって」

「まあいいって、おんなじクラスなんだしラッキーってことで」

「う、うん」

そういつて、ボク達はクラスに手をつないで向かっていく。

その途中に、馬鹿でかい教室があった。

ほうこれが、噂のAクラスかすうううううげえ設備。

これ、学生にはもつたいなくね!?

これがAクラスか・・・

じゃあ、Fクラスは普通位かな？

「だ、だまされた・・・」

「えっ!?!なにが!?!」

「なにがってサキ」

知らないほうがいいかな？

ばっちゃん・・・これはないよ。

そう思い空いてる席?に座る。

知ってる顔がいくつかいるな

これからどうなるかな

進学！！その貳

先生が遅れているということ、代わりに僕の悪友の雄二が進行中。周りを見てみると、バカ代表の明久がいない。

あいつが他のクラスなら、世界が崩壊するな、うん。

そんなアホなことを考えていたら

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

おっ噂をすれば

「さつさと座れこのウジ虫野郎！！」

さすが、雄二容赦ねえ

「な、なにやってるのさ、雄二」

「先生が遅れるらしいから、その代わりだ」

「先生の代わりって雄二が？何で？」

少しは考えるよ

「一応このクラスの最高責任者だからな」

「え？それじゃ雄二がこのクラス代表？」

「ああ、そうだ」

「これでこのクラス全員が俺の兵隊だな」

そうなんだが・・・

もつと言い方はないのか・・・

そして明久を見ると笑ってる？いやにやけているが正解か、大方雄二を説得すれば、

クラスを動かせるとか思ってるんだろうな

わかりやすい奴。

「それにしても・・・流石Fクラス」

明久がゆうのもわかる。

何故なら畳に加えてちゃぶ台と座布団が机椅子代わりだからだ。

「えーと、ちょっと通してくれますか？」

明久の後ろから声が聞こえた。明久の背後を見ると先生と思われる

おっさんがいた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますから」

「はい、わかりました」

「うーっす」

明久達は空いてる場所へ座った。

「えーおはようございます。2年F組担任の福原慎です。」

皆さん全員にちゃぶ台と座布団は支給されていますか？必要なものは極力自分で調達してください。」

ここはホントに学校か？

そう思っていたら、明久が話してきた。

「あれ？なんでナオがここにいるの？サキなら解るけど・・・」

「ああ!？」

「ひいつ!？ご、ごめんなさいなんでもないです」

俺が言うと明久が謝ってくる。

「ボクはテストをボイコットした」

「そ、そうなんだ」

明久はまだびくびくしている。

こいつには恐怖という名の調教をどこしてある。

ボクに逆らうことにボクの発明品実験をこいつでしているからね

「では、自己紹介でも始めましょう。そうですね。廊下側の人から
お願いします。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

秀吉か

サキほど、じゃないがかわいいよな

もつともあいつは男だな

「・・・土屋康太」

あいかわらずだな

ま、おれも人の事言えないが

「ーです。海外育ちで日本語の会話は出来るけど読み書きが苦手です。」

あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」
今度の人は・・・誰だ？

初対面だが、男ばかりのこのクラスには

「趣味は吉井明久を殴ることです」

・・・まあある意味いいな。

明久に手を振ってる点から知り合いだとは思うが、わからんな
お、サキのばんか

「伊藤、咲、です。趣味は家事全般です。」

と、特技はけ、剣術でしゅ、よ、よろしくお願いします」

ありやく顔が真っ赤になってるわ

サキはこういうの苦手だからな

お、次はボクか

「藤堂直だ・・・以上」

ボクが自己紹介するとあたりがざわついた。

あん！？なんか文句あるのか！？

そう思っていたら

急に教室の扉が開き、息を切らせて入ってきたのは・・・

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

この学園の生徒なら誰でも知っている姫路瑞希だった。

学年でも1、2位を争う彼女がこんな所に来るなんて

「はいつ！質問です！」

既に自己紹介を終えた生徒の1人が高々と手を挙げる。

「あ、は、はいつ。なんえすか？」

「なんでここにいますか？」

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

成る程、テスト中の途中退席は0点扱いだからな

俺がそれだからな。

クラスがバカなことを言ってる間に姫路は雄二と俺の間の空いてる
ちゃぶ台に座った。

ちなみに席順は左からサキ、ボク、姫路、雄二、バカじゃなくて明
久。

「はっ！！なんかバカにされた気が」

気のせいだ

雄二がアイコンタクトしてくるが拒否した。

「じゃあねえやるか」

「あのさー姫ー」

「「姫路」」

「は、はい。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「藤堂 直だ」

「ごめんね、瑞樹ちゃん、ナオくんが無愛想で」

「あ、サキちゃん一緒のクラスなんですか！？」

姫路です。よろしくお願ひします。」

「所で、姫路は体調は大丈夫か？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君！？」

「姫路。明久がブサイクですまん」

流石は雄二。ナイスフオロー

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインみ細くて綺麗だ
し、

全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

「そうだな、ボクも明久に興味がある人知ってるぞ」

「え？それはー」「そ、それって誰ですか！？」

予想外に釣れたな。

「確かー久保・・・」

「久保さん？」

「利光。男だ」

「・・・・・・・・」

あつ、声を殺して泣いてるし

「明久く9・9割冗談だ」

「鬼だ」

何のことやら

そんなことを話していたら

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

先公ごほん、ごほん先生に注意された。

言い返そうとしたら、

バキッ！！ バラバラバラ・・・

ちよつと叩いただけで教卓がゴミになった。

西村先生並の力なのか！？

「代えを持つてきます・・・」

ただ単に古かっただけか。

「あ、あはは・・・」

あの姫路さんでも苦笑いか

先生が予備の教卓を取りに行つて少しして、明久に声をかけられた。

「・・・雄二、ナオ、ちよつと廊下に来て」

「別に構わんが」

「却下だ」

「えく！！ここは来るとこでしょ！？」

「あん！？ああそういえばまた、完成したんだけどな」

「な、なんでもないです」

「わかればよろしい」

そついつたらあきらめて、廊下に出て行つた。

「もう、ナオくんは明久くんをいじめすぎだよ」

「いやいや信頼の証ですよ??」

「どんな信頼なの!？」

どつせ、姫路のために試合戦争でもやるつってとこだる。
わかりやすすぎ

進学！！その式（後書き）

直は結構白状モノです。

そのことを、理解してもらって、読み進めていってください。

戦争が・・・今!?

明久と雄二が帰ってきて少しして先生が帰ってきた。

壊れた教卓を壊れかけの教卓に替えて、HRが再開される。

何も起こらず、最後の雄二に回ってきた。

「坂本君、君が最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて雄二は教壇まであるいていく。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは好きなように呼んでくれ」
ちなみに代表はクラスでトップの成績を納めた生徒の事だ。

他のクラスならまだしも、Fクラスなのでたいした変わりはないだがね

「さて、皆に1つ聞きたい」

そう言つて教室内の各所に視線を移す。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちゃぶ台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・不満はないか？」

「・・・大ありじゃああっ!!」「」

ああ〜うるせえ〜!!

「だろっ?俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

「そつだそつだ!」

「いくら学費が安いとはいえ、この設備はあんまりだ!改善を要求

する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案だが・・

FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

ついに、我が悪友が戦争の引き金を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

文月学園には科学とオカルトと偶然により完成させた「試験召喚システム」というものがある。

これはテストの点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を教師の立ち会いの時のみに呼び出すのが可能となる。

なんでも生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された試みらしい。

その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位で行う戦争「試験召喚戦争」と呼ばれる戦いだ。

でもテストの点数が重要になる戦争ではAクラス一人相手に対しこちららは3人

いや相手次第では4、5人いても負けるかもしれない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
雄二はそう宣言した。

「何を馬鹿なことを」

「出来るわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

否定的な意見が教室中に飛び交う。

まあ当然だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。

それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り分け否定のポーズを取っても無駄だよな。

しかも恥も外聞もなく低い姿勢から覗くなんて、やはり男の中の男だ。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムッツリーニ

「・・・!! (ブンブン)」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。でも、ムッツリーニという名前は別だ。

その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て揚げられる(笑)。

「姫路については説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに、彼女ほど頼りになる戦力はないだろう。

「木下秀吉だっている」

「おお・・・!」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「当然俺も全力を尽くす」

確か雄二は昔、神童とも呼ばれていたんだっけ。

「それに、吉井明久だっている」

・・・シーン

「ちよつと雄二! なんでもそこで僕の名前を呼ぶのさ!」

「こいつの肩書きは>観察処分者くだ」

「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?」

「ちつ違つよ!!」

ちよつとお茶目な16歳の愛称で・・・」

『観察処分者』

学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分

>特例として物に触れるようになった代わりに痛みや疲れがフィードバックする召喚獣で

雑用等の力仕事をこなす<学園開校以来の問題児 該当者：吉井明久1名

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二!」

「さて、次の奴はウチのクラスの隠し兵器だ。」

「無視するなあー!!」

まさかボクのことを

「藤堂 直。通称」

その名を聞く前にボクはポケットから小型の銃の形をしたものを取り出し

雄二を狙う。

ピュッ

雄二の頬をかする。

「続けるのなら次は当てる」

友達だつて関係ない

ボクの黒歴史を広める奴は殺す。

「ちよ、ナオくんだめだつて、こんなところでそれ使つたら」

「大丈夫だよ、サキ、出力は最低にしてあるけど雄二一人殺すくらいいけないよ」

え?もしも、最大だつたらツて決まってる。

このクラス位、簡単に壊せる!!

「それがダメなんだつて」

「ま、まっつてわかつた、言わないから」

ザワザワ

役を果たせ！」

「ストップ、雄二！！・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。騙されたと思っていつてきてくれ」

「嫌だよ」

珍しく雄二が押されてるな。

珍しいからみてようかなと思ったけど、話がすまないから助けるか
「明久」

「ふっ。僕はDクラスへの宣戦布告なんて・・・」

「姫路が惚れるかもよ」・・・すぐに行つてきます！！」

テクテクテク・・・

毅然とした態度でDクラスに向いましたよ

「すまん。ナオ」

「いやいや、礼には及ばんよ。それより雄二」

「なんだ？」

「バカというものは便利だな（ニヤリ）」

「ああ。全くだな（ニヤリ）」

さあ明久は帰ってくるのか！？

戦争が・・・今！？（後書き）

直が使った物は、レーザー銃です。

最大出力は、クラスを壊すまでは、行かないけど半壊する。

最大出力だと、一発しか打てない。

作戦会議（前書き）

はやく清涼際が書きたいです・・・。
がんばります！！

作戦会議

「騙されたあつー!!」

そういつて明久が教室に転がり込んできた。

「「やはりかそうきたか」」

綺麗に八モるボクと雄二

「やはりつてなんだよ! やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか!」

「けど最終的には自分の意志でいったよな」

ボクが雄二に問いかける

「ああ、そうだな」

「そ、そうだけど」

「吉井君、大丈夫ですか?」

そういつて姫路が明久に駆け寄ってきた。

それをみた島田もよってきた

「吉井、大丈夫?」

「あ、うん大丈夫」

「そう、よかった、まだウチが殴る余地があるんだ」

「もう、ダメ! 死にそう」

「そんな事はどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ
どうやら場所を変えるみたいだ。」

「おい、サキ場所かえるみたいだぞ」

とサキに呼びかけたら

サキの周りに野郎どもが群がっていた。

「うん、ナオくんすごい」

そういつて、ボクのところまできた。

「何はなしてたの」

「ん? えっと、ナオくんとはどういう関係? とか聞かれた」

「あいつらー!!」

あいつらよりもよって人の彼女を・・・殺す!!

「どうしたの？ナオくんまさか妬いてくれたの？」

「ったりまえだ!!」

「え!？う、うんあ、ありがとう」

前に康太と明久が話していた。

「ー何色だった？」

なに聞いてんだあいつ？

「・・・みずいろとくろ」

ああ、そういうことか・・・ん？黒？

不思議に思い、サキに聞こうかと思ったら。

顔真っ赤にしてるし!？

とゆうことは・・・

「ねえ、康太ちょっと聞きたいことがあるんだが・・・誰のをみたつて？」

「・・・!!(ブンブン)」

「ほう、なら今死ぬか、この劇薬を飲むかどちらか選べ」

「ちよっ!!ナオくんそれはだめだって」

サキが止めに来た。

「康太、命拾いしたな」

俺は仕方がなく、劇薬をしまった。

そんなことをしていたら屋上についた。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

眩しい。

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろすのに続いて各々腰をおろした。

ボクも腰をおろしたら、いつもどおりにサキが後から抱きしめてきた。

「ん〜 やっぱりこの抱きごちはいいな〜」

「いつみても、おぬしらラブラブじゃな」

秀吉が茶々をいれてくる。

「いいだろ」

ボクも負けじと言い返す。

周りを見てみると、島田と姫路が驚いていた。

二人は初めてだっけ？

「あゝきにするな、島田に姫路」

「う、うん（いいなあゝあんなにラブラブでウチもいつか吉井と）」

「は、はい（わ、わたしもいつか吉井君と）」

何かブツブツ言ってるけど何かあったのかな？

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんですけど」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「明久くん。水やお塩はお昼とは言えないよ」

「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「彘？」

お、いきなりの発言やっぱり姫路つて明久に・・・

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

明久お前つて奴は

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったね、明久くん」

「うん！」

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作って
るなんて」

あれ？一人だけのご不満のようだな
まさか島田も・・・それはないな

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃう」

「・・・(コクコク)」

「・・・お手並み拝見ね」

「わ、わたしたちはえ、遠慮しときます」

サキが震えながら、そう答えた。

どうしたんだ？

(ナオくん、わけは、後から話すから話し合わせて)

サキはそうつぶやいた。

ボクは頷いて

「ゴメン、姫路、ボク好き嫌いが多くて・・・サキの弁当しか食べ
ないんだ

けど、ボク達は気にしないで明久たちにはお弁当作ってきてね」

俺はそう答えた。

「わかりました。それじゃ、吉井君達に作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな・・・ノノ」

(ありがとう、なおくん)

(どういたしまして)

ボク達は呟きあった。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き・・・

「おい明久。今振られると弁当はなくなるぞ」・・・にしたいと思っ
ていました」

明久・・・それじゃただの変態だ。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」
「まったくその通りだよ」
「だって・・・お弁当が・・・」
「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」
「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？
階段を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラスじゃろう？」
「そういえば、確かにそうだね」
「まあ色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。
戦うまでもない相手だからな」
「え？どういふ事雄二？」
「明久。周りの面子を見てみる」
「えーっと・・・美少女3人と馬鹿が2人とムツツリが1人それと子供が1人いるね」
「誰が美少女だと!？」
「ええ!?雄二が美少女に反応するの!？」
「誰がムツツリだ!？」
「え〜!!ナオまで!？」
「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にナオ」
「そ、そうだな」
「とにかく、雄二は姫路に問題がない以上、Eクラスとの戦争は無意味と言いたいんだ」
「それなら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」
「景気づけにしたいと最初に言っただろ？」
それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
「あ、あの!」
「ん?どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけた、って・・・
吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「それはなく明久が姫路の為って・・・」

「それはそうと！」

むう。せつかくチャンスを作ったのにな

「さつきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。」

「いいか、お前ら。ウチのクラスはー最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・(グツ)」

「が、頑張りますっ」

「わたしも!!」

「ま、がんばりますか」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、ボクらの戦争の狼煙があがった。

さてさて、Dクラス相手ならボクがでる幕はないだろうな
研究の続きでもしますか・・・。

Dクラス戦（前書き）

今回は咲がメインで書きました。

Dクラス戦

（咲side）

いよいよ、戦争が始まるうとしています。

わたしは、秀吉くんの部隊の副隊長になりました。

各部隊長や副部隊長には、ナオくん手製の無線機が渡された。
何でこんな物つくたんだろう??

「よろしくね、秀吉くん」

「よろしくじゃ、咲」

そして、始まりの鐘が今……なり始めた。

「よし！秀吉部隊いってこい」

「うむ、いつてくるのじゃ」

「うん！いつてきまゝす」

そういつて私たちは戦場へ

教室を出て、すぐの渡り廊下でDクラスの人たちと交戦しました。

「布施先生、Fクラス伊藤 咲交戦します」

「承認します」

「試獣召喚」

「……試獣召喚」「……」

私がそういつとみんなが一斉に召喚獣を召喚した。

「こちろもいくぞ!!」

「……試獣召喚」「……」

Dクラスの人たちも、召喚してきた。

わたしの足元から魔方陣が出てきて。

私の召喚獣が出てきた。

学園の制服に刀って似合わないにもほどがるな

さくして頑張りますか。

「Fクラス 伊藤 咲 VS Dクラス 永田 亮太

科学 65点 102点」

あゝやっぱり点差があるな」

永田くんの召喚獣は、ハンターみたいな格好に、武器は大太刀だった。

「死ね!!!」

「やられたあゝ」

もう一人やられてるし、ナオくん抜きで勝てるのかな？

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！鬼の補習室は嫌なんだっ!!!」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！
終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるから
な」

「た、頼む！見逃してー！イヤアア（ボタン、ガチャ）」

西村先生・・・どこから出てきたの？

あゝこれは、明久くんにげるかも・・・

そう思い、わたしは雄二くんに、連絡する。

「雄二くん」

「わかつてる」

どうやら聞こえていたみたい。

「覚悟!!!」

「わ、ちよつと」

問答無用でかかってきてるし・・・

そう思いながら、敵の攻撃をよける。

「なに!?!」

「もう、あぶないな」

そういいながら、わたしは召喚獣の刀を抜刀させる。

「今度はこっちから!!!」

そういつてわたしは召喚獣をまえにだす。

「ばかめ、返り討ちだ」

そういつて大太刀を振り落とす。

わたしはそれを受けようとせず、斜めに飛ぶ。

そして、すれ違いざまに一太刀浴びせる。

「さっきのはまぐれじゃなかったのか」

「いやいや、まぐれだよ」

はい、嘘です。

まぐれであんなことできないよ（笑）

「Fクラス 伊藤 咲 VS Dクラス 永田 亮太

科学 65点 80点」

うーん、浅かったかな？

「まだまだ」

そして、振り向きざまに首に一撃

「Fクラス 伊藤 咲 VS Dクラス 永田 亮太

科学 65点 0点」

「一人目!!!」

「くっ!!! 亮太の敵だ」

「Fクラス 伊藤 咲 VS Dクラス 山田 透

科学 65点 117点」

また、100点台!?

さっきより手ごわそうだし・・・

相手の召喚獣は、西洋の鎧を着て、武器は槍・・・

顔見えてないし、防御力ありそ

「いくぞ!?!」

しかも、遅いし・・・

これじゃよけてくださいつていつてるもんだし・・・

「咲、後ろじゃ!!!」

「えっ!?!」

わたしは、後からの攻撃をなんとか受け止めた。

「ちっ!!!」

「ちょっと、女の子に二人がかりって男としてどうなの!?!」
そのまま、攻撃してきた生徒を山田くんのほうに突き飛ばす。
ちょうど、攻撃してきた生徒は山田くんの攻撃を受けた。
そして、戦死した。

「えつと・・・二人目??」

「てめえ、よくも」

「うん、なんかごめん・・・」

「すまぬ、咲ワシは、一時撤退する。」

「うん、わかった」

「咲はどうするのじゃ!?!」

「Fクラス 伊藤 咲

科学 57点

(まだいけるな)

そう思い秀吉くんに告げる。

「私が殿をするからみんなは点数の補充してきて」

「う、うぬ、あまり無茶するんじゃないぞ」

「わかってるって」

「伊藤まかせた」

「なるべく早く戻る」

などなどそれぞれにいつて、皆は引いていく。

さあ本気出しますか。

そう思い、刀を鞘にしまった。

ふふつ、明久くんたちが来るまでに何人倒せるかな?

「ほう、勇気あるね、伊藤さん」

「俺達相手に一人ですか」

「あなた達なんて、一人で充分です」

そういつてやると

「なめやがって」

「一斉にいくぞ」

「おおっ!!--!」

そういつて数人が私目がて攻撃してくる。

わたしはそれをみんな、最低限度の動きで避けつつ、距離をとる。そうしたら、一人が私に向かって来た。

わたしはそれを、相手が攻撃してくる前に居合いで一太刀浴びせる。相手が固まっている隙に、刀を鞘に戻し、下から顎に蹴りをいれる。相手の首が見えたところに居合いで、相手の首を落とす。

(まず一人)

とわたしは呟く

「貴様っ!!!」

そういつて突っ込んでくる奴の武器を刀ではじき、鳩尾に拳を入れる。

そのまま、喉、顎に打ち込んでいく。

(二人目)

A「よくも!!!」

B「死ね!!!」

C「終わりだ」

そういつてきた三人連続できた。

わたしは、Aに居合いで一太刀浴びせ、Aを蹴っ飛ばしBに当てる。そして、Bごと斜めに切りつける。

(三人目)

そして、Aが消えた瞬間にBを横薙ぎに切りつけ、自らも横に飛ぶ。わたしがいたところにCの攻撃がくる。

攻撃をはずしたCに向かって、わたしは切り上げる。

そして、CとB切り抜ける。

(四、五人目)

刀を鞘に戻し

「ふう〜ありがとございました。」

そこではじめて、敵がいらないことを悟った。

あれ、やりすぎちゃった。

「あっ、咲」

「明久くん」

「まさかかたずけちゃったの」

「う、うん」

持久戦に持ち込まなくちゃいけなかったのにやちゃった。

そう思っていたら、

「いたぞ、Fクラスだ」

Dクラスの増援が来た。

わたしは自分の点数を見る

「Fクラス 伊藤 咲

科学 45点」

まだ戦えるけど・・・

「わ、わたし点数の補充に戻るね」

「うん、了解」

「それじゃあ、みなさんがんばってください」

「・・・おおう！！」「・・・」

明久くんの部隊がそう答えた。

わたしが教室に戻ると

ピンポパンポーン

『船越先生、船越先生。』

この声は、須川くんだけ？

なにやってるんだろ？

『吉井明久君が体育館裏で待っています。』

ええ〜！？

船越先生って確か・・・

今期を逃して、単位を盾に交際を迫るって噂の

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の話があるそうです』

や、やつぱり・・・

あ、明久くんご愁傷様・・・

そう思っていたら渡り廊下のほうで

『吉井隊長・・・あんた男だよ』
とか

『吉井隊長の死を無駄にするな〜!! (笑)
など色々聞こえた。』

「ナオくん、いまのつて・・・」

「ああ」

「直が流したんだ」

そう雄二君が答えた。

「あゝあ、明久くんも終わったね」

「どうせ明久だからいいだろ」

「それもそうだ」

「んじゃ、そろそろ、援護にいつてくる」

「頑張つてね〜」

「おう、暴れて来るよ」

「なにいつてんだ、直は待機だ」

「はあ〜!?!それはないぜ雄二」

「おまえと姫路は切り札だからな」

「しゃねえな〜」

「残念だったね、ナオくん」

「そういうことだから、野郎共行くぞ!!」

「「「「おおっ!!」」」」

そういつて、本軍が出陣した。

「サキ、大活躍だったな」

「えへへ」

「また、腕上げたな」

「そうでしょ!お父さんに稽古つけてもらってるんだ〜」

「マジか!?!」

「うん」

私の家は、ナオくんの家、藤堂家の分家である。

伊藤家は代々藤堂家の『護り刀』だったんだって。

だけど、この時代そんなものいらなからって、今の当主つまり学園長が『護り刀』の任を解いてくれて、

友好の印としてナオクんの許嫁として、私を選んでくれた。

はじめは、何を勝手なことを！とか思ったけど、今は感謝してる。

お父さんは『護り刀』としての技術を残したいっていった。

それは、私も同じ気持ちだから稽古をつけてもらってるんだけど・

家は弟が継ぐから大丈夫なんだけどね。

「あと、召喚獣って中々修行に役立つんだよ」

「?どういうこと」

「ほら、わたしの召喚獣の武器って刀じゃん」

「ああそういうこと」

「うん」

召喚獣を操っていると真剣を振るってるきがするんだ。ちよつと感覚は違うけど。

「ところで、ナオくんは何してたの?」

「良くぞ聞いてくれた、ボクは長年の研究をしていたのだ」

「ああ、『背が高くなる薬』だっけ?」

「そうだ、そしてなんと、試作品ができたのだ!」

「おお!!すごい!!」

「なんと、もう飲んだ」

「ええっ!?!だいじょうぶなの??」

「うん、今のところはね」

「効果はどのくらい??」

「僕の予想だと結構かかる」

「そ、そうなんだ・・・」

背が高いナオくん何ってナオくんじゃないのに・・・

ナオくんは小さくてかわいいからいいのに・・・

そう思っていたら、明久くんたちが帰ってきた。

「お、明久帰ってきたか」

「うん、ところで、直、校内放送聞いてた？」

「ばっちりな」

「須川くんがどこにいるか知らない？」

「あん？もうすぐ帰ってくるんじゃないか？」

「そ、そうなんだ・・・殺れる、僕なら殺れる」

そういつて明久くんは、包丁と何かが詰まってる靴下をとりだした。

「やるなって、ちなみに、あの放送を指示したのはボクだよ」

「おまえかっー！！」

そういつて、明久くんがナオくん襲い掛かる。

わたしは咄嗟に

「あ、船越先生」

と言ってしまった。

「ちっ！！」

そのまま掃除ロッカーの中に隠れてしまった。

「バカやってないで決着を着けに行くぞ」

『『『『『おおっー！！』『』『』『』』』』』

そういつて大半の人は出て行った。

「ナオくんはかくれてて」

「りよゝかい」

「明久くん、船越先生が来たってゆうのは・・・嘘です」

「なんだって！！直はどこだ！！」

「決着を着けに行きましたよ」

「わかった、ありがとう咲」

「いえいえ」

私にお礼を言った、明久くんはすごい勢いで走っていった。

「サキ、すまない」

「ナオくんのためですから」

そういつて、私たちは手をつないで戦場へ向かっていった。

Bクラス戦前・・・(前書き)

姫路の弁当イベントはなしの方向で・・・

Bクラス戦前・・・

（帰り道）

「なあ、サキ」

「なに？」

「なんで、姫路の弁当断ったんだ？」

「それはね・・・」

「それは？」

「瑞希の料理はね、殺人料理なの」

「はあ？」

「えっと・・・とりあえず、食べないほうがいいよ」

「うーん、わかった」

なんか釈然としないが、同意しとく。

そして翌日、ボク達が登校すると明久が廊下をもうダッシュしてきた。

「イヤアアアア！！」

「明久おはよう」

「明久くんおはようございます」

ボク達を無視して、明久は駆けて行ってしまった。

「なんだあいつ」

「何があつたんだろうね」

そして、教室に着きクラスメイトと挨拶をかわして、雄二に聞いてみた。

「一時間目のテストの監督が船越だからだ
納得した。」

ようやくテストが終わり、昼休み。
退屈な時間がやっと終わった。

サキは、ダウンしてるし・・・
どうしようか・・・

「よし飯食いに行くか」

「あ、あの皆さん！昨日の約束の」

「おお、もしや弁当かの？」

そんな話が聞こえてきた。

後から感想でも聞いてみるか。

明久たちを見ていたらサキが後から抱きついてきた。

「お、復活したか」

「うん、はあゝ癒される」

「ボクは抱き枕か何かなの？」

「そんなことないよ！！抱き枕なんかより全然いいよ」

「そ、そうですか」

あまりにストレートに行ってきたので、照れてしまった。

「あ、今度抱き枕にさせてね」

「べ、別にいいけど・・・」

「やった」

周りからの、視線が痛いがまあいいだろう。

「そういえばさ」

「なんだ？」

ボクとサキは隣同士で、弁当を食べている。

もちろんサキの手作りだ。

「なんでBクラスなんだろう？」

「それはな」

「うん」

「Bクラスを使って、Aクラスを脅すためだ」

「??どついうこと?」

「試験召喚戦争は下位クラスが負けた場合は設備のランクが1つ落とされるだろ？」

「うん、それと関係あるの？」

「Bクラスにボク達が勝つたらボク達と設備交換でしょ」

「ああ、なるほど、設備を交換しない代わりにAクラスと勝負しろと交渉するわけね」

「そういうこと」

飯も食い終わり、Bクラス戦に使いそうな道具の手入れをしていたら、雄二たちが帰ってきた。

「あれ、明久くんは？」

「宣戦布告に行かせた」

「またか・・・かわいそうに」

そう呟いたら

「言い訳を聞こう」

「予想通りだ」

「殺す！！」

「落ち着け」

おお！！いいのが入ったな。

そのまま明久は転がった。

「先に帰るぞ、明日もテストだから、勉強しろよ」

「ボク達も帰ろっか」

「うん、明久くんさよなら」

ボク達はそういって、帰っていった。

Bクラス戦の不安は、代表がああ、根元恭二だ。

まあ、何かやってきたら倍返しで行きますか。

！」

そういつて、ボクは腕輪を発動させた。

召喚獣が薬を飲み、体が変異した。

顔は狼っぽくなって、爪は長く伸び、牙が鋭くなっていった。

ああ、暴走状態になっちゃった……。

ま、いいか、そう思っていたら、召喚獣が一人に飛びついた。

そして、食いちぎった。

「まじかよ……」

だけれが、呟いた。

ちなみにこのモード、1秒に100点消費する。

「なんで、点数が回復してんだよ」

そして、喰った召喚獣の点数を奪える。

「なんでもいい攻撃しろ」

そういつて、一斉に攻撃してくる。

その攻撃をよけずに一人に向かって、突進する。

攻撃をかするが、敵を喰らって、回復する。

「ふふふつ、そら逃げ惑え!!」

「鬼だ、悪魔だ」

ちなみにこのモード、自動操縦もとい、制御不能なのだ。

本能のおもくままに攻撃するって言うか、まるきり獣なのだ。

10人くらい倒した頃に明久たちがやってきた。

「助太刀するぞ、試獣召喚」

「まって!!」

Fクラスの一人が召喚すると、ボクの召喚獣がそいつの召喚獣に向かっていた。

そして、つめで切り裂いた。

「藤堂!？」

「直!？」

みんなが驚いているが、

「召喚するなよ、今暴走状態なんだ」

「なにそれ!？」

明久が聞いてきた。

「腕輪の効果なんだ、敵味方関係なしに襲い掛かってくる」

「そ、そうなんだ」

「Fクラス 藤堂直

総合科目 2037点」

だいぶ減ってきたな・・・

それから、何人か倒したら効果を失った。

ちつ楽しい時間はもう終わりか

「もういいぞ、俺は撤退する」

「わ、わかったよ」

そして、おれが撤退しようとしたら、秀吉に止められた。

「直、ワシも戻るぞ」

「なんで？」

「Bクラスの代表じゃが・・・あの根本らしい」

「そうだな、一応明久も連れて行くか」

教室にて

「・・・つわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「なんとゆうか、地味だな」

教室にあるちゃぶ台は穴だらけ、

シャープや消しゴムはヘシ折られるとはなんとも地味な嫌がらせだな。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二、どうして教室を空にしてたんだ？」

「協定を結びたいという申し出があったな。調印の為に教室を空に

していた」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「確かにそっちの方が都合がいいですからな」

「どうして？」

「姫路さんが万全な状態で勝負できるようだ」

「そっか」

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれん」

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

手を挙げる雄二に背を向け、秀吉を追い掛けていった明久。

「ボクも手伝うよ」

「たすかる」

「ボクも早く補充テスト受けたいからね」

補充テストが大体終わった頃にみんなが帰ってきた。

なぜか、明久はぼろぼろで・・・

そして今は協定ど通りに休戦中だ。

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの予想以上に被害は少くないがな」

ボクの召喚獣が、暴走したからね。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」

「ほんとだね」

「・・・(トントン)」

康太が雄二の肩を叩いていた。

康太は今日情報係だったな。

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったのか？」

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「・・・(コクリ)」

CクラスとBクラスって何かつながりがあったような。

「雄二、どうするの？」

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもないだろうしね」

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

「秀吉は念の為にここに残ってくれ」

「ん？なんじゃ？ワシは行かなくても良いのか？」

「秀吉は次の作戦の要だからな」

「じゃ、行こうか。ちよつと人数少なくて不安だけど」

途中で、島田と須川を捕まえて、これでボク、サキ、

明久、雄二、姫路さん、ムツツリーニ、島田、須川で8人だ。

Cクラスの前まで着き、Cクラスの代表が出てきた。

なんか見たことあるんだよな。

「サキ、あいつってなんて名前だった？」

「えつと、小山さんだよ」

小山ってまさか！？

雄二が不可侵条約を結ぼうと提案した、後にきずいた。

「どうしようかしら、根本くん」

「当然却下だ」

「な！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。」

試召戦争に関わる行為を一切禁止したよな？

先に協定破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな！」

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をー」
「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試獣召喚！」
須川が生n・・・もとい盾になつてくれた。
「みんな今のうちに逃げるよ」
サキがそう促し、みんなが一斉に逃げていった。
少しすると、姫路が遅れてきた。
「ここは僕が引き受ける！雄二はみんなを連れて逃げてくれ！」
おお、明久がなんかかつこいい。
「よ、吉井君、私のことは、気に、しないで」
「・・・わかった。ここはお前に任せる」
「・・・(ピタッ)」
「だめだ康太、お前は明日重要な役割があるから」
「・・・(グッ)」
「んじゃ、ウチは残るわよ？」
「ありがとう、助かるよ」
「じゃあボクも残ろうかな」
「ナオくんが残るなら私も」
「ありがとう、咲、直」
「んでどうするの？」
「僕に考えがあるんだ」
「明久にか!？」
「明久くん!？」
「二人ともひどいよ!？」
「冗談だ、お前の策つて奴を信じるよ」
そうはいって見たもののやっぱり不安だ。
ボクも考えておくか。
『『『いたぞ、Fクラスだ』』』』
「Bクラス、そこで止まるんだ」
「いい度胸だな」
「その前に、長谷川先生にお話があります」

「「試験召喚」」

「Bクラス生徒×6 A B C D E F

数学 156点 123点 175点 115点

137点 98点」

「Fクラス生徒 藤堂直 伊藤咲

数学 450点 89点」

ちよつとこつちが不利か？

「くらえ！」

そういつてEが突っ込んできた。

それを、避ける、そしてスパナを相手の頭にたたみこむ。

これで、Eは戦死。

「くつ！！伊藤は任せる他は藤堂をやれ」

「わかつたわ」

Cがそう叫び、他が指示に従った。

「サキ、いけるか？」

「多分ね・・・なるべく早くおねがいねナイト様」

「大丈夫そうだな、なるべく早く助けるよ」

「よゆうだな！！」

そういつてAが襲い掛かってきた。

それを避けずに、下から上へスパナを相手の武器めがけて振るう。

スパナが、武器にあたり、武器が吹っ飛ぶ。

だが、他の生徒が、襲い掛かってきた。

とりあえず、一番弱いFにスパナを投げる。

そして、他の生徒の攻撃を避けつつ、スパナを拾う。

「流石に厳しいな」

腕輪を使うしかないのか？

迷っていたら、一斉に攻撃してきた。

「しょうがねえ！！」

そう叫び、腕輪を使う

召喚獣が、薬を飲んだ。

暴走状態にはなるなよ！！

そう思っていたら、召喚獣が光だし変化した。

その姿は、半袖の特攻服に両手からは、光の剣ができていた。

「なんだあの姿は！？」

「関係ないわ！！」

「死ね！！」

ボクは咄嗟に襲い掛かってきた。DとFを斬り付けた。

なんかいつもより早いような・・・

まあいいこのままAとBを倒す。

ボクはBに向かって剣を投げてみた。

剣はBに突き刺さり、消え手元に戻ってきた。

そのまま、Bの首をはねた。

Aには、両手の剣を投げた。

それでは足りなかったみたいなので、もう一回投げた。

そして、Aは倒れた。

終わった。サキは！！

（咲SIDE）

う〜ん倒せると思うけど、時間かかるな〜

点数が倍くらいか・・・

がんばりますか。

「一瞬で終わらせてやる」

そういつて、攻撃してきた。

わたしはそれを、足払いしてこけさせる。

そのまま、顔に蹴りをいれ、居合いで切りつける。

そこで、相手が反撃してきたので避ける。

ここまで入れれるなら、本気を出す必要はないだろう。

そう思っていたら、相手がジャンプ切りをしてきた。

わたしは相手が剣を振る前に、腹に鞘を突き刺し、

そのまま、空中に浮かし打撃と斬撃をあわせたコンボを放った。

17・18・19・20hit言った時点で床に打ち落とす。

SIDE OUT

「ひいゝお、鬼ゝ」

「鬼とは失礼な」

そういつたサキは、どこかすつきりしていた。

「ナオくん終わった？」

「おう、今回はマジで運がよかった」

「そうみただね、ナオくんの召喚獣がかっこよくなってるもんね」

「ああはじめてこんなモードになったよ」

「明久君たち大丈夫かな？」

「大丈夫だろ、教室に戻ろうぜ」

「うん」

そういつて教室に戻っていった。

「「ただいま」」

「無事じゃったようじゃな」

「おつかれさん」

「ん、雄二も無事だったんだ」

教室を見ると、さっきのメンバーがそろっていた。

全員無事のようにだ。

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

「明久つて島田を名前で呼んでたか？」

「まあ、事情があるんだよ」

「さて、お前ら。こうなった以上、Cクラスも敵だ。

同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦

の直後にCクラス戦はきつい」

「それならどうしようか？このまま勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな・・・」

「心配しなくても大丈夫だ、な雄」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、
だ
決着は明日だ。」

Bクラス戦 前編（後書き）

ダッシュブレード

簡単に言ってしまうと、エトレック

ローラースケートにエンジンがついてる感じ

ただの妄想です。実際には存在しません！！

Bクラス戦 後編

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、雄二は開口一番そう告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Cクラスに仕掛けるんだって」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にはコイツを着てもらおう」

雄二の鞆から出てきたのは・・・女子用の制服？

「雄二君どこで調達したの？」

「気にするな。それより秀吉、コイツを着てくれ」

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

一卵性双生児といわれてもおかしくないくらい木下と似てるからな。

後は細かな部分を修正すれば、簡単に化けられる。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ・・・」

「・・・！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

「さあな？俺にもわからん」

「おかしな連中じゃのう」

ボクもそう思う。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「わかった。ボクも行くよ」

「面白そうだから私も」

「僕も行く」

Cクラス前

「さて、すまないがここからは一人で頼むぞ秀吉」

「気が進まんのう」

不満を漏らす秀吉

「まあ、演技の練習だと思ってね」

そついでゆ咲

「うむ、そうじゃな、だが、あまり期待せんでくれよ」

そついつて、Cクラスに向かっていった。

「大丈夫かな？」

明久が心配していると雄二が

「多分大丈夫だろ」

そして、秀吉がCクラスに入ってしまった。

「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！」

「な、何よアンタたち！」

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

自分で言っておいてそれはないわ〜（笑）

「アンタたち、Aクラスの木下ね？ちよっと、点数いいからって

調子に乗ってんじゃないわよ！ 一体、何の用！？」

「私たちはね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内に

あるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんて豚小屋で十分だわ！」

「なっ！ 言つに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！

？」

ほうFクラスは、豚小屋ですか・・・

さすが、あのクズの彼女、言ってくれるじゃないか。

「私達は今、試召戦争の準備をしているの。手が汚れるのは嫌だけ

ど、

貴女たちを特別にふさわしい教室に送ってあげるわ。覚悟しておく

のね！」

そついつて、帰ってきた秀吉は、どこか清々しい顔をしていた。

「秀吉くんお疲れ様です」

「これで良かったかのう？」

「作戦もうまくいったしBクラス戦の準備に戻るぞ」

そしてBクラス戦が再開し、ボクはというと

「雄二、おわったよ〜」

「おう、ご苦労さん」

補充テストを受けて今終わったところだ。

今回は雄二の近衛部隊ということだった。

暇だなぁ〜とくつろいでいたら

「雄二!!!」

明久がやってきた。

「どうした、明久。脱走か？ チョキでシバくぞ」

どうやって、やるんだろう、是非みて見たい。

「話があるんだ」

明久が乗らないいつもなら突っ込んでくるのに。

こいつはバカだが、その根底はいい奴だ。

だから、こんな態度をするのは誰かが傷ついた時だけだ。

「……とりあえず、聞こうか」

そう雄二がいった。

明久の話をまとめると、根本の制服が欲しく、

理由は言えんが姫路を戦闘から外して欲しい、らしい。

一つ目は良く分かんが雄二が即認めてやったら、悲しそうな顔をしていた。

が、二つ目は戦力を下げる結果になるからな……

「頼む、雄二!」

……あんなふうに頼まれたらな雄二だって折れるしかないか。

「分かった。ただし、条件がある」

「条件？」

「姫路の役割をお前がやれ。必ず成功させる」

そして明久は迷いなく頷いた。

雄二は明久に根本を攻撃しろと指示を出す。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。かならず成功させる」

「……………」
考え込む明久に、雄二は「Dクラスの件で出かけてくる」と声を掛けていった。

そして教室を出る寸前に、

「明久」

「？」

「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリー二のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼してる」

「……………雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そういつて教室をでていった。

数秒後、明久が

「よっしゃ、あの外道に目にももの見せてやる！！」

そういつて気合を入れていたそれを見たボクは

「明久、手を貸すよ」

そういつて、明久と教室を出た。

Dクラス

「二人とも本当にやるんですか？」

遠藤先生がそう尋ねた。

「もちろんです」

「はい、もちろん」

ボク達はそう答えた。

「それならDクラスじゃなくてもいいじゃないですか」

「このバカは、観察処分者だからね、Fクラスでやったら教室が壊れるからな」

そういつたら、

「考え直してみてわ……」

「いえ、直には日ごろの礼をしなければいけませんから」

「わかりました。お互いを知るための喧嘩も必要かもしれませんが」
そういつて遠藤先生は承認してくれた。

「試獣召喚」

「行け!!」

そういつて、明久の召喚獣が攻撃してくる。

そして、それを受け止める。

それが繰り返される。

そうしていたら外から

「お前らしい加減諦める。暑苦しく教室前に集まってるんじゃないやねえよ」

「どうした？ 軟弱なクラス代表サマはそろそろギブアップか？」
根元と雄二の声が聞こえた。

Fクラス本隊を率いて、主力戦に臨んだようだ。

「はア？ ギブアップするのは、そっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？ 頼みの綱の姫路さんも、藤堂もいないようだか？」

「……何。すぐに来るさ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

「……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやってい
るのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出
せ！」

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか!」

「あとは任せたぞ、お前ら」

その声を聞きボクは

「いまだ明久」

そう明久に言う。

「だぁぁーっしゅぁぁーっ！」

そういつて、あるものに攻撃する。

ドカアツーーーーー！

明久が攻撃したものはボク特製の爆弾だ。

「ンなっ!？」

ボクは一気にクズのところまで行き、

「遠藤先生! Fクラス藤堂が」

「Bクラス山本が受けます! 試獣召喚!」

「ちっ! 近衛部隊か!」

だが大半の近衛部隊は引き寄せた。

突然だが、ここで少し教科の先生の話しよう。

各教科には担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が出る。

採点が早かったり、点数があまったり、さまざまだ。

その中で唯一、保険体育だけ、他とは少し違った特徴がある。

それこそが、担当が体育教師であるがゆえの 並外れた行動力。

ダン、ダンッ!

エアコンの代わりに涼を取るために開けられた窓から、一人の生徒と教師が現れた。

そいつらは、とてもよく知っている奴で、

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……!」

「……Bクラス根本恭二に保険体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ!」

「 試獣召喚」

「Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二

保健体育 441点

203点」

ムツツリ二の召喚獣が、敵を一刀のもとに切り捨て

Bクラス戦が終結した。

Bクラス戦が終了し、ボク達は全員Bクラスに集まった。

「明久大丈夫か？」

「……………」

「返事がない、ただの屍のようだ」

「い、生きてるよ……………」

明久がやっとな返事した。

「あゝ、すまん明久、思った以上に威力がでかかった
とりあえず謝った。

「いいよ、とりあえずは作戦が成功してよかったよ」

「本当に悪かった」

明久に謝っていると

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表
？」

そう聞こえたので雄二のほうにかけつていった。

「……………」

根本は雄二の言葉にだんまりで答えた。

自分が不利になった瞬間これとは、つくづく器の小さい男だ。

「本来なら、お前らの設備と俺らの設備を交換し、
ステキな畳ライフを送ってもらうことになる。が、今回は免除して
やる」

この言葉に、BクラスFクラス関係なくざわめきが起こる。

これを鎮めるのは、ボクの役目かね。

「みんな落ち着け。Bクラスは、所詮通過点。

ボクたちの目的は、Aクラスだろ。だから」

そこで一旦止めて、雄二を見る。

アイコンタクトで、この先も任せてくれるそうだと。

「条件を飲めば、Bクラスは解放する」

「……………条件はなんだ」

「お前のことだ、根本恭二」

「俺、だと？」

「そうっす。お前はちよつと、やりすぎた。目障りなんで、
ここらで一つ・・・地獄をみせてやるよ」

「で、ここでBクラスにチャンスだ」

『チャンス？』

「そう。根本には、Aクラスに試召戦争の準備が出来ていると伝え
てもらおう。

ただし、意思と準備が出来ているとだけ伝える。間違っても宣戦布
告はするな」

「それでいいのか？」

「本当にそう思ってるのか？」

そういって、ボクは笑ってみせる。

「お前がコレを着て実行すればだけどね」

ボクが取り出したのは、秀吉が着ていた。
女子の制服だった。

「馬鹿言え！ そんなの着れるか！」

「そっかあゝ、それは残念それじゃあFクラスと

設備の交換でもするか？」

「くっ！！ひ、卑怯な！！」

「卑怯？ハアッ〜ン！！どの口がそんなこと言うのかな？

ボク達がお前のやってきたことを知らないとしても？」

そう脅しをかけてみる

「何なら学園長に直接言ってもいいんだぞ」

「・・・・・・わかりました(ボソツ)」

「なんだって！！」

「わかりました」

「何がわかったんだ？」

「女子の服着て、Aクラスに行つてきます！！」

「OKだ、少し眠れ」

そういって、スタンガンを押し当てた。

「ぎゃあああ!!」

そういつてクズは眠りに着いた。

「さあBクラスの皆さん、話は聞きましたね？」

周りを確認してみる。

Bクラスの生徒はみんな、頷いている。

「じゃあ、お願いしますね」

そう微笑んでお願いした。

『ああ、必ずやらせるよ』とか

『それだけで、教室が守られるならやるさ』など聞こえた。

クラスメイトからも、よく思われていなかったらしい。

そうおもい、明久にかけていく

「明久、大丈夫か？」

「何とか動けるようになったよ」

すごいなこいつ

「なら着付けは任せたよ」

「了解っ！」

そういつて、明久が歩んでいった。

ボクは、もう一つアイデアが浮かんだので、実行した。

「Bクラスの皆さん、もうひとつお願いがあります」

そう、ボクは周りにいった。

「Aクラスに行った後、根元にもとい、

クズにもうひとつやってもらいます」

周りがザワめきだつ

「クズには、女装したまんまPVを撮ってもらいます」

周りが驚いた。

「これ以上クズが悪さしないように、脅迫するためのものです。

なので、おもつつきり、恥ずかしいのを撮ってください」

そう笑顔で言い放った。

『わ、わかったよ』

と聞こえたので

「じゃあお願いしますね」

と笑顔で言つて、教室を後にした。

あとから、雄二が

「おまえって本当に鬼畜だな」

といつてきた。

そしてFクラスのみんなは

『藤堂には逆らわないでおこう』とおもっていた。

Aクラス戦前編（前書き）

久しぶりに投稿

もうひとつのほうにちから入れるようになっちゃって・・・
いいわけですすみません

Aクラス戦前編

点数の補充を終えた、二日後の朝

「まずは皆に礼を言いたい。

周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、

他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「雄二の気持ちは嬉しいが、でもそれは勝利の後に残してくれ」

雄「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。

勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃないんだーっ！」

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、

これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞きましたから驚かないが、他の人達はざわめいている。

『どづいつことだ？』

『誰と誰が一騎討ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二が机を叩いて皆を静める。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

霧島翔子。才色兼備で学年主席、姫路でもかなりの差をつけられるような相手だ。

普通に考えれば雄二が勝てる可能性はほぼ0に近いな……普通に考えればだがな

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ!？」

「次は耳だ」

あいつにバカ呼ばわりされたら、そりゃカッターを投げるわ

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。」

まともによりあえば勝ち目はないかもしれない。

だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？

まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった。今回だって同じだ。

俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。

俺達の勝ち揺るがない……俺を信じて任せてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『おおおーっ!!』』

皆、雄二を信じてくれてますう。意思確認は必要ないみたいです
ねえ

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを
限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

「日本史？」

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、
方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負でなく純粋な点数勝負とする」

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？」

そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、

ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、

そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「？それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、

小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「雄二くん、あまりもつたいぶらないで教えてください」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。

ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」
ある問題？どんな問題だ？

「その問題は・・・大化の改新」

「小学生レベルならいつに起きたとか？」

「おお。ビンゴだ島田。お前の言う通り、

その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「起きたのは645年だよ」

「そう。大化の改新が起きたのは645年。

こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

「雄二、みくびるな！！明久は間違えている！」

「そそそそそ、そんなことないよ？」

「明久くんそれじゃあ、間違えてるっていつてるもんだよ？」

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。

そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とはおさらばって寸法だ」

あ、スルーですか？

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

「雄二、それには答えな・・・ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙えっ！」

・・・やっぱりこうなるか

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

こんな時にもクラスの団結は働くものなんだ

「遺言はそれだけか？・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。」

それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？」

男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

明久達の視線が一人に集中する。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

…なぜ姫路に視線が集中するんだ？

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教え
たんだ」

それが大化の改新か。

「アイツは一度教えた事は忘れない。だから今、学年トップの座に
いる」

「今回だけは有効な作戦ですねえ」

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は……」

『『『システムデスクだ！』』』

そして当日・・・

うん？交渉の部分？

ああ、ボクは逃げました・・・。

なんでってそれは・・・

「では、Aクラス対Fクラスの7対7の一騎打ちを始めます。

4科目がFクラスで3科目がAクラスが決める、でいいですか？」

「ああ」

「……問題ない」

ああ、もう始まる、その話はまた後で！！

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

「ワシがやるっ」

一組目は木下対秀吉か。

一番彼女の事を知ってるのは秀吉だけだからある程度は優位に・・・

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

小山ってCクラスの代表さんでクズもとい、変態の彼女さんか？

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「姉上、勝負は・・・どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？」

どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっ

ているのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して・・・

・・・

あ、姉上！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！！
ガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻ってきた。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくる？」

「い、いや……。ウチの不戦でいい」

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスは佐藤美穂さんですか。だれそれ？

こちらは……

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

「大丈夫だ。俺は明久を信じている」

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。」

この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことがないが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラス生徒からもそんな声が聞こえる。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

相手の佐藤さんは何かに勘違いしたみたいだな

「あれ、気づいた？ご名答。」

今までの僕は全然本気なんてだしちゃいない」

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。」

今まで隠してきたけれど、実は僕 - - 左利きなんだ」
バカだ

「Aクラス 佐藤美穂VS Fクラス吉井明久

物理 389点

62点」

「このバカ！テストの点数に引き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁し

て！」

「よし。勝負はここからだ」

「そうだな」

「ちよつと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？食べんの？」

「雄二貴様〜！！」

「はいはい、落ち着いて」

「そういって咲が溝尾に拳を入れていた

明久ドンマイ……」

「では、三人目の方どうぞ」

「はい、わたしがいきま〜す」

「そういって、サキが出て行った。

「じゃあ俺が相手だ」

「そういつてでてきたAクラス生徒。

「科目はどうしますか？」

「英語でお願いします」

「わかりました、それでは……はじめてください」

「「試獣召喚」」

「Fクラス 伊藤 咲VS Aクラス 生徒

613点

386点」

『『『『『えつー！ー！ー！』』』』』』

「周りが驚いていた。

「ここまでいいなんて」

「雄二も驚いていた。

「今回は調子がよかつたんだ〜」

「テレながらそう答えるサキ

「一気に行くよ！！刀の羽」
ソードサークル

「そういつた、瞬間サキの召喚獣がサラシに袴姿になり、日本刀を両手に持ち、周りには、5本の日本刀が浮いている。」

「やっぱり、5本だ」

サキは喜んでいた。

「決めるよ」

そういうと、4本の日本刀が相手の四肢を奪い、召喚獣が、回転しながら相手に切りかかる。

そして、着地をしたら、相手が倒れた。

「まずは、1勝だね」

そうサキが微笑んだ。

Aクラス戦 後編

「よし次はナオだ、行って来い」

「いいけど・・・」

そういつてボクは立ち上がった。

「ナオくんですか、じゃあわたしがいきますね」

そういつて、相手が立ち上がった。

「やっぱり、さく姉か」

立ち上がった相手はよく知っている相手だ。

藤堂 朔夜

ボクの双子の姉だ。

「ナオくん」

「な、ナニかな？さく姉？」

「Fクラス（あなた）は、なぜAクラス（わたし）と闘っているのかしら？」

笑顔で言っではいるが、目が笑ってない・・・

「そ、それは、クラスの設備の向上するために」

「あら、わたしはそんなことを言っているんじゃないのよ？」

それは別にいいことなのよ。

私が言っているのはね、あなたが何故わたしに歯向かっているのか
って事よ」

やっぱり怒ってる。

だからあんまりAクラスとやりたくなかったんだよ。

Aクラスにはさく姉がいるから

しかも、ボクは幼少の頃からさく姉に絶対服従だった。

「そ、それは・・・」

「なにかしら」

「さく姉に勝つためかな？」

「ふふ、本気で言っているのかしら？」

「ほ、本気だつて言つたら？」

さく姉はちよつと困つた感じの顔になつてから

「そうね、ナオくんをここでボコボコにした後で、おしおきつて言うのはどうかしら？」

『おしおき！』

『おい聞いたか？お仕置きだつてよ』

『ああ、聞いたぜ藤堂さんのおしおきだつてよ』

『ああ、なんかな・・エロいな』

『俺もそう思つた』

なんか、後のクラスの連中が言つてるよ

気楽でいいよな

「はは、そ、そんなわけないじゃないか」

冗談だつて冗談、ほ、本気にならないですよ」

「そうですか、それならボコボコにするのはなしでお仕置きだけにしますか」

さく姉は残念そうな顔でそういった。

「はははさく姉も冗談だよね？」

「ふふふ冗談に聞こえますか」

「ははは」

「ふふふ」

二人は笑い出し

「高橋先生、棄権します」

僕が先に折れた。

「そ、そうですかでは、勝者Aクラス」

ダツ！！ 僕が逃げる音

ガツシ 姉さんが僕の腕をつかんだ

「ナオくんどこ行くんです？まだ話は終わつてませんよ」

姉さんがそういつてきた。

「ボクはもう話すことないからね、だからはなして」

「あらそうなんですか？わたしはありますから付き合ってくださいませ

んか」

そういつて僕は引きずられっっていく
引きずられながらおもったこうなったのも……雄二と明久のせ
いだ!!

「なあ、サキ」

「なに雄二君」

「助けなくていいのか」

「行ってきていいの？」

「ああいいぞ」

「ありがとう、じゃ言ってくる」

そういつてサキもナオが引きずられた方向に向かった。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

ボクが帰ってきたら大画面にそう記されていた。

「だいたい、53点って何？0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃー」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについて否定はしない！」

否定出来ないの間違いなんじゃない？

せめて否定できるようにしような

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

ごもつともです。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

つてことは凶星かよ。

忠告はしたはずなのに……

「……ところで、約束」

約束？なんのことだろう？

「明久、約束って言うのはなんだ」

「あナオお帰り」

ナオはいなかったもんね

負けた方が何でも言うことを聞くって約束だよ」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

ああだから康太がカメラを整備しているのか

「……………それじゃー」

霧島さんが姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

そして、小さく息を吸い、

「……………雄二、私と付き合ってたか？
言い放った。」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

つまり、霧島に立っていたあらぬ噂や彼女の行動は、一途に雄二を思っている所以だったわけだ。

「拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

「霧島」

「……………なに、藤堂？」

「ナオ！！たすけてくれ！！」

ボクは一回雄二を見て笑い

「これをもつていけ」

そういつて、いくつかの道具を渡す

「……………これは？」

「これはスタンガンだここのスイッチを押しながらこうゆう風に当てると」

バチッ

「ギヤアアアアア」

「こんな感じに雄二が気絶するそして、この錠剤が」

そういつて錠剤を霧島に上げながら

「これは自白剤みたいなものだから、これを飲ませた後は霧島の質問に何でも答えてくれるぞ

質問した際にはこれも使用してくれ」

そしてボクはMP3プレイヤーも渡す

「……………使い方がわからない」

「大丈夫だ、これはボク特製だからどんな人でも使えるようにしてある

使用するときはこの、赤い丸のボタンを押してくれればいい終わったらもう一回押してくれればいい
すべてが終わった後にボクに渡してくれば後は僕が処理していつでも聞ける状態にするから」

「……ありがとう、藤堂はいい人」

「おう、がんばれ霧島」

そういつてボクは霧島に向かって親指を立てる

「……うん」

そういつて雄二を引きずっていった

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

そういつて西村先生が現れた。

「何ですか先生？」

サキがそう答える

今から我が（・・・）Fクラスに補習について説明しようと思ってな

我がFクラスかつてことは・・・

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習

授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。

これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「……なにいつ?!?!?」「」「」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来る

とは、正直思わなかった。

でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡ってい

く上では強力な武器の一つなんだ。

全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに、グウの音も出なかった。

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。」

何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ！ 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には、悔い改めるといふ発想はないのか？」

雄二もこの場にいたら、おんなじ様なこと言っただろうな」

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

「いやいや、明久はマジで勉強した方がいいぞこれからな」

「ナオくん言ってもムダだよ」

そんな会話をしていたら、西村先生がため息をつきながら

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

「ありません！」

明久がそう言い放った

「おい、明久もう終わりみたいだからコレやるよ」

「危ないものじゃなかったらもらっよ」

「あんまり疑うなよ、コレ売って金にでもしな」

ボクは明久に映画のチケット3枚あげた

「いいの！！ありがとうナオ」

「いいよどうせ一回見た映画だったし……楽しんでこいよ」
そういつてボクは帰ろうとした、その背後で

「アキ」

「吉井君」

「なに、美波に姫路さん」

「わたし（ウチ）その映画見たかったんだ」

「え！？ダメだよこれはお金にするんだから」

などという会話が聞こえた。

オリキャラ設定

名前は藤堂 直

身長は149cmと小さい。

10月12日

血液型O型

容姿

黒髪で腰まで伸ばしている。

本人いわく研究で、きる時間がないだけらしい、

だが、咲に切りそろえてもらっているので、顔にはかかっていない。
よく小学生に間違えられる。

顔は中世的で見方によれば美少年。

性格

周りのことはあまり気にしない。

結構毒舌。

だが特定の人物には、(女性)優しい。

英語だけがFクラス並

通称 サド・サイエンティスト

召還獣

白衣姿で武器はスパナ

腕輪は「ドーピング」

ランダムに薬を飲み様々な効果がでる。

伊藤 咲

身長は165cm

誕生日は10月17日

血液型A型

容姿

銀髪で肩まであるサイドのポニーテール

かわいい系よりきれい系

身体はモデル系

性格

おっとりしていて、みんなにやさしい

責任感が強く、ナオの無茶苦茶な行動をいつも止めている。

ナオと逆で英語はAクラス以上

通称 サド・サイエンティストの良心

召還獣

制服で武器は刀

腕輪は「ソードサークル」

二刀流になり、点数によって違うが最高5本まで、
刀を自分の周りを出して操れる。

藤堂 朔夜

身長 160cm

容姿

肩までかかる黒髪で、毛先が少しパーマになっている。

顔はナオと瓜二つ

性格

冷静で、他人とあまり接点を持つとしない

自分で壁を作っているがあまり表には出さない

召喚獣

迷彩服にアサルトナイフの二刀流

話し合い(前書き)

ほぼ原作どおりです。

話し合い

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

私たちの通う文月学園では、新学年最初の行事である

『清涼祭』せいりょうさいの準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室の改造を始めるクラス。
焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。

この学校ならではの『試験召喚システム』ロンクホームルームについて展示を行うクラス。

学校祭準備の為にLHRの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。

そして、Fクラスはというと

「吉井！ こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

今教室にいるのは、私、瑞希、島田さん、秀吉くん、ナオくん（私の膝枕で爆睡中）

「出し物は決まったか」

「西村先生……まだです」

「なに！！……他の連中はどうした」

そう聞かれて私たちは一斉に、外を見る。

「あいつらは……連れ戻してくる」

そういつて教室を出て行った。

すこししたら

「全員教室へ戻れ！」

この時期になつてもまだ出し物が決まっていないうちのクラスだけだぞ！」

という怒声が聞こえた。

「さて。そろそろ春の学園祭、

『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが、
野球から帰ってきた雄二君が私たちに向かって言ってきた。」

「とりあえず、

議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。」

そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

興味がないみたいでいい加減だった。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？　ウチがやるの？　うん……、ウチは召喚大会に出るから、
ちよつと困るかな」

突然の指名に目を白黒させている島田さん。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方がこういう役は合っ
てるんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタ
イムアップになる」

眠たげに返事をする我らがクラス代表。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？　そつなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「学校の宣伝みみたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希つてば、お父さんを見
返したいって言うてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。」

『Fクラスのことをバカにされたんです！　許せません！』　って怒
ってるの」

「あら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、

Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ
「……………」

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「三人とも。こっちの話が続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言うてるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ？」

チラツと雄二君が明久くんの方を見た。

「ん〜…………。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……………」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。」

その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

皆もいいな、と雄二君がクラスメイトたちに告げる。

すると、教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思っ』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

『俺は伊藤さんと結婚したい』

まだ、あきらめない人がいるんですか……

「サキは俺のだ……（むにゃむにゃ）」

私の膝の上でそういう声が聞こえた。

（ありがとうナオくん）

わたしは心の中で感謝を述べた

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

「って、秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな
なんて」

「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやっってもらった方が良いじゃろっ？」

「むう……。それはそうだけど……」

明久くんが嫌々そうに返事する。

もうあきらめた方がいいのに……

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がると、島田さんはボロボロの黒板に決選投票候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

あ、やっぱり

『候補？……明久』

明久くんだ

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

『どうする？ どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……』

「こらあつ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！」

あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

それは自分もクズだって認めてるよね？

「ほらほら、アキってば。そんなことより

ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ

……」

島田さんに促され、明久君は渋々と席を立って前に出た。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ……」

入れ替わりに席に戻る雄二くん。

あくびを堪える気もないようで、全身からダルいオーラが立ち上っている。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

「それじゃ、ちやつちやと決めるわよ。」

「クラスの出し物でやりたいものがあれば拳手してもらえる?」

「島田さんが告げると、数名が手を挙げた。」

「全員がやる気なしってわけでもないみたいだ。」

「はい、土屋」

「……………(スクツ)」

「……………写真館」

「……………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど
私も同意権だった

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる?」

「あいよー」

【候補? 写真館『秘密の覗き部屋』】

「明久くんもだった」

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶! と言いたいけど、流石に使い古されていると思う
ので、

「ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶? それってどうなの?」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを
着ているんだ」

「ウェディングドレスか……………」

「わたしも速く着たいな」

「どんなのが似合うかな?」

「そして新婚初夜……………」

「ナオくんにあんな事やこんな事をするんだ」

「などと妄想に浸っていると」

「皆、清涼祭の出し物は決まったか?」

「西村教諭の声が聞こえた」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田さんが言うと、鉄人はゆっくりと黒板に目をやった。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

「……補習ほしゅうの時間を倍にした方が良いかもしれんな」

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

そういつて口々に言い訳をしている。

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

流石は教師。クラスメイトを売ってその場を逃れようとする魂胆が気に入らないみたい

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

前言撤回あなたは教師ですか？

「まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ。」

稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの西村先生の台詞。それを聞いて、クラスの皆の目が急に輝きだした。

『そうか！ その手があつたか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に活気づく教室内。

「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

どうしたんだらう？ 設備に不満がないとは思っていなかったけど、ここまで率先して動くなんて、珍しいわね……

『出し物はどうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

クラスの中に活気が溢れ、色々な意見が飛び交い始める。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、

その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。』

たった二日間の清涼祭りや儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

やる気は出てきたみたいだが、まとまりが聞かなくなってきた。

『はいはい！ ちよつと静かにして！』

島田さんが言うがあまり効果がない

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

どんどん意見がバラバラになっていく。

しかし、この喧騒でよく寝ていられるな、ナオくん

「もつっ。とにかく静かにして！ 決まりそうにないから、

店はさつき拳がった候補の中から選ぶからね！」

「ほらっ！ ブーブー言わないの！ この三つの中から一つだけ選

んで手を挙げること！ いいわね！」

反論を眼力で押さえ込み、決を採りにかかる島田さん。

雄二君の人もデタラメってわけではなさそうだ。

「それじゃ、写真館に賛成の人！ はい、次はウエディング喫

茶！ 最後、中華喫茶！」

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！ 全員、協力するように
！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
と、須川君が立ち上がる。

「……………（スクツ）」
それと、何故か康太君も立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「…………… 紳士の嗜み」

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。

厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところが集まって
！」

「それじゃ、私は厨房班に！」

「ダメだ姫路さん！ キミはホール班じゃないと！」

「そうよ！女の子はホールの方が売り上げに貢献できるわ」

平然と厨房班に入ろうとした瑞希を呼び止める。

クラスの設備がかかっているこのお店、断じて食中毒で終わらせる
わけにはいかない！

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、

痛あつ！ み、美波！ 僕の背中サンドバッグじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて…………。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑
張りますねっ」

できればホールだけで頑張っつて欲しい…………

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

と島田さんと明久くん（ニブチン）は

「うん。適任だと思う」

予想どおりですね

「……………」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。

そんなに可愛いんだから、

もちろんホールに決まってみぎゃああつ！

み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命に関わる大事な骨が！
自業自得ですね

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529k/>

バカと科学者と召喚獣

2011年1月9日17時31分発行